こども通信

塚田こども医院
小児科・アレルギー科
漢方内科
上越市栄町2-2-25
TEL 025-544-7777(代)
025-544-7779(保育室)
FAX 025-544-8456
ホームページ
www.kodomo-iin.com

秋の深まりとともに、夜の寒さが強く感じられる季節となりました。冬の準備を急がないといけませんね。あー、嫌だな（苦笑）。

＊　＊

何気なく見ているネットのニュースですが、衝撃的なものがありました。それは「イギリスで子宮頸がんによる死亡がゼロになった」というものです（2面参照）。

日本では毎年1万人の女性が子宮頸がんになり、そのうち3千人の方が命を落としています、今でも。それがゼロになったというのは、驚きでした。何が違ったのでしょうか。

イギリスでは子宮頸がん予防ワクチンを徹底して行ったそうです。中学生でワクチンを受け、その子が20歳代になって、子宮頸がんになったとしても亡くなりません。



日本でも2013年4月に子宮頸がん予防のワクチンが始まりました。しかし、2か月後にはほぼ中断。厚労省が「積極的な接種勧奨を一時控える」という方針を出しました。そして、接種率は1%と、ほぼ接種なしの状態になりました。

これは、接種後にけいれん、痛み、麻痺などの神経症状が出たことによります。「副反応」かもしれない、というものでした。

この時のニュースを覚えているでしょうか。ニュースバリューがあるということで、繰り返し伝えられました。

しかし、症状は身体表現性のもので、この年代では時々起こしています。「紛れ込み」の可能性があります。

結局この因果関係はないとされ、2022年4月に再開されましたが、この間、ワクチンを受けた方はとても少数であり、今でも半数程度にとどまっています。

手元に一冊の本があります。『10万個の子宮～あの激しいけいれんは子宮頸がんワクチンの副反応なのか』（村中璃子著、2018年2月刊）。このままであれば、10年間で10万個の子宮が失われ、その持ち主である女性、そこから生まれるはずだった子どもたちも・・。ワクチンがあるのに、それをしない日本はどうなっているのか。

今、この本の意味を噛み締めています。

オンライン診療を行っています。
希望の方は予約画面からどうぞ。

感染症情報

インフルエンザが流行し、新潟県にも発生注意報が出されました。例年より２、３か月早い流行です。10月下旬にはやや下火になっていますが、今後冬にかけて再度の発生があるものと思われます。十分にご注意ください。予防接種は先月より始まりました。乳幼児では脳炎・脳症、心筋炎など、高齢者では肺炎の合併など、重症化を阻止する働きはあります。多くの方に受けていただきたいと思います。

新型コロナウイルス感染症の流行は少し続いています。周囲で発生があれば、警戒をしていてください。予防はマスク、換気、三密を避けるなど、重層的に行ってください。

ヘルパンギーナ、手足口病といった夏かぜは減っています。

ヒトメタニューモウイルス感染症、RS ウイルス感染症も少しの発生になりました。

感染性胃腸炎の発生があります。嘔吐と下痢があり、乳幼児では脱水や低血糖にならないように注意が必要です。

溶連菌感染症も少しですが発生があります。強い咽頭痛と発熱が特徴です。抗菌薬による治療が必要です。

麻疹（はしか）の発生はありませんでした。しかし全国的には麻疹患者は相当出ています。麻疹は予防接種が重要です。1歳と、小学校入学前1年間の2回接種を行っています。95%以上の接種率で流行はなくなると言われています。ぜひ受けてください。

子宮頸がん予防

ワクチンは絶対的効果

小学校6年生から高校1年生の女の子（およびキャッチアップ接種対象の皆様）を対象とした「HPVワクチン（子宮頸がん予防ワクチン）」について、最新の海外の実践データを交えて大切な情報をお伝えします。

●子宮頸がんという「防げるがん」

子宮頸がんは、主に「ヒトパピローマウイルス（HPV）」という一般的なウイルスへの感染が原因で起こるがんです。このウイルスは、将来大人になって性交渉を経験する中で、多くの人が一生に一度はごく自然に感染するものです。

通常は自然に体から消えていきますが、一部が体内に残り続けると、数年から十数年かけてがんに進行してしまいます。日本では毎年約1万人の女性が発症し、約3000人もの尊い命が失われています。

しかし、このがんは「ワクチンで防ぐことができる唯一のがん」なのです。

●イギリスの実践例が証明した「命を守る圧倒的な効果」

「本当に効果があるの？」と不安に思われるかもしれません。2008年から国を挙げて学校での接種をいち早く進めてきたイギリスから、非常に心強い最新の研究結果（2026年発表）が届きました。

○20代の死亡者が「ゼロ」に

12～13歳（日本の中学生にあたる時期）でワクチンを接種した世代が大人になった結果、2020年～2024年の5年間、イギリスの20歳～24歳の女性において、子宮頸がんによる死亡者が「史上初めてゼロ」になりました。

○死亡リスクがほぼ消失

30歳になる前に子宮頸がんで亡くなるリスクが、ワクチンによって「ほぼゼロ」にまで減少したことが科学的に証明され、イギリス全体でこれまでに約200人の命が救われたと推計されています。

ウイルスの感染を経験する前の「今（10代前半）」接種を完了することが、将来最大の効果を発揮する一番のポイントです。

○次のステージへ

イギリスでは2023年から、12歳～13歳の接種回数が、従来の2回から1回になりました。

また2019年から男子への接種も開始されており、パートナーへの感染予防や、男性自身のがん（咽頭がんなど）予防にも繋がっています。

●日本で受けられるワクチン

現在、日本の定期接種では「9価ワクチン（シルガード9）」という、より予防効果の高い種類を公費（無料）で受けることができます。これにより、子宮頸がんの原因となるウイルスの8～9割をカバーできるようになりました。

しかし、日本では受ける方がまだ少ないです。（5割から6割に止まっているようです。）

●副反応について

ワクチンですので、注射した場所の痛みや腫れ、一時的な体調の変化（立ちくらみや緊張による気分の変化など）が起こることはあります。

過去に報道されたような多様な症状についても、その後の国内外の大規模な調査により、「ワクチンとの因果関係は認められない」という見解が科学的に出されており、現在は日本でも国が積極的な接種を推奨しています。

当院では、お子様がリラックスして受けられるよう細心の注意を払い、接種後も万全の体制で見守りを行います。

【接種のご案内】

・対象：小学校6年生～高校1年生の女子（期間内は公費・無料で接種可能です）

・回数：15歳未満で1回目を接種する場合は、通常「計2回」の接種で完了します。それ以外の接種は3回になります。

大切なお子様が将来、健康な体で自分らしい人生を歩んでいけるよう、今できる最高の予防プレゼントとして、ぜひ前向きにご検討ください。